

(海外レポート)注目できる土壤保全草

クラウンベッチ

生産部 岡田 晟

クラウンベッチは多分アルファルファの種子と混ざってヨーロッパよりアメリカに渡来したものとされている。現在北アメリカ大陸では、北はカナダから南のガルフまで、また大西洋から太平洋岸までの広域にわたって土壤、気候条件を選ばずおおい茂っている。クラウンベッチが生育すれば、雑草は抑圧されてしまい、また表土のはがれた瘠せ地や岩盤状の土壤にも生育するという土壤保全草としてすぐれた特性を持っている。これは傾斜地の土壤保全草として無類のものである。加えて夏季間、長期にわたり美しい花を楽しむことができ、高速道路に面した斜面などは、緑のレッドフェスクやブルグラスなどイネ科の保全用グリーンベルトと相俟って、クラウンベッチの飽きない花の美しさは、旅行者に好評である。

クラウンベッチの品種として、ペンギフトがあるが、これは1935年発見され、Dr. Fred V. Grauが育成した。1947年になって、ペンシルバニア大学の普及員は道路斜面に播種をはじめた。今日ではアメリカの多くの州の数千のスロープが、濃緑な植物とバラ色のピンクの花色で美しく彩色され保護されている。ペンシルバニア州は、この人目を惹くまめ科永年草の広域利用の元祖になっている。このほかエメラルドという品種もあり、現在ペンシルバニア大学では白花のクラウンベッチも育成中である。

播種に当っては、pHが6.5~7.0になるよう石灰を10a当り200~500kg施し、施肥はN:P:K8:16:16の比率で80~100kgを与える。播種直前根粒菌を接種する。根粒菌の接種法は、種子約10kgに対し、カーボンに吸着された黒色根粒菌約100gを用いる。初めに半分50gを水200gにとかし種子を浸す。よくしみこんだところで残りの菌を粉のまままぶして直ちに播種する。根粒菌は有効期限があり、使用時まで開封しないことが肝心である。

播種量としては、ハイウエー・スロープなどでは10a(1,000m²)当り2~2.5kgをベレニアルライグラスまたはレッドフェスク2kgと混播する。宅地造成地とか、小地域では5kgをベレニアルライとかレッドフェスク5kg



ペンシルバニア州のペンギフトクラウンベッチ

と混播する。

播種期は特に制約はないが、春まきすれば当年開花がみられる。

クラウンベッチは多少耕起できるのであれば、あまり土質を選ばない。しかし乾燥の極端なところとか、常時深い日陰になるような場所は好ましくない。もし雑草が先に生えているのであれば、鎌で5cmくらいに刈って播種すべきである。

播種法としては一般の牧草種子と同じで、小面積ならば手播きでよいが、散播のほかに傾斜の急なところでは60cm幅の横条播にしてイネ科草を散播する方法もとられる。また種子の流亡を考慮して上層部を厚播きする方がよい。厚い覆土は結果がよくなく、播種直後3.5cmぐらいに藁か乾草のようなものでマルチ(被覆)をして保護してやると20日位で完全に発芽してくる。

種子は1kg当り275,000粒である。

傾斜のひどい場所では、水溶性の糊や肥料それに着色した賦形剤を加えて動力で播種する「吹き付工法」の方が効果的である。また特殊な方法としては、株を移植したり、予めポット育成した苗を植え込むこともできる。

クラウンベッチの深く重なり合った根が土壤をとらえる役をする。降雨にあたっては、スポンジが水を吸うようにこの根が保水を良くする。スロープにガッチリ定着し土壤を保護する点では、永年性イネ科草よりもクラウンベッチは優れている。さらにもう一つの特徴は、冬季積雪の多いスロープでは雪を掴むので、スリップ防止に役立つということである。

土壤保全の目的でスロープに作られたクラウンベッチは刈取りの必要はない。ほかに不良土壤地帯での飼料作物としてことに羊の放牧用に使うこともでき、家畜の飼料としての総可消化養分量はアルファルファの約80%に相当する。放牧用の場合の播種量は10a当り0.4~0.5kgの条播である。

クラウンベッチは種子の価格が若干高いので、経済面からどこにでも使うというのではなく、このマメ科草でなければならぬ特色の場所に有効適切な使い方をすることによってその真価が発揮されるといえる。